

能楽殿に「松」祭礼文化継承

熊本市の「御旅所」

宗城大生ら鏡板に描く

宗城大美術学科の学生らが、藤崎八幡宮例大祭で「御能」が奉納される御旅所の能楽殿（熊本市中央区新町）の舞台奥にある鏡板の松模様を手がけた。例大祭の「神幸行列」がある18日に、「こけら落とし」を迎える。

【1面参照】



藤崎宮例大祭で“こけら落とし”

同宮によると、能楽殿は100年以上前からあるとみられ、老朽化が進んだため、市の補助金を活用して昨年から改修工事を実施。ひのき舞台など全体的に新調し、「地元の祭礼文化を次世代に継承する」との思いを込め、鏡板は同学科に依頼した。

鏡板は幅約6尺、高さ約2・3尺。日本画家の中村賢次教授(59)らが、木のうねりや葉の形など、元の絵を踏襲しつつデザインを考案。日本画を学ぶ学生や卒業生ら22人が岩絵の具や泥絵の具で塗り上げた。

同大学院2年の池田絵菜さんは「絵と違って遠くから眺めるため、グラデーションを濃くするなどの工夫を学んだ。歴史の一部に携わってうれしい」。中村教授は「学生にとって、地域に役立つという貴重な経験にもなった」と完成を喜ぶ。

御能の奉納は、今年413回目。神幸行列の朝随兵が御旅所に到着する午前9時から、金春流と喜多流の御能、和泉流の狂言が演じられる。観覧無料。

能楽殿の鏡板に松模様を描いた学生ら＝熊本市中央区

(河北希)